銀色の爪

佐野洋

Yō Sano

銀色の爪

佐野 洋

集英社

銀色の爪

一九八二年一月二五日　第一刷発行

定価　九八〇円

著者　佐野洋

発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇

郵便番号　一〇一

電話　出版部　二三八―二八四二

販売部　二三八―二七八一

印刷所　凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1982 Y. SANO Printed in Japan

0093-772357-3041

銀色の爪——目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　生きていたのか？　7
第二章　では、誰が？　36
第三章　どんな理由で？　67
第四章　なぜ自殺を？　97
第五章　どうすべきか？　128
第六章　誰の手で？　159
第七章　どんな関係が？　189
第八章　何のために？　226

装幀　荒川じんぺい

銀色の爪

第一章　生きていたのか？

やはり地下鉄を利用すべきだった。間垣はいらいらしながら、時計を眺めた。

座談会は六時からであった。現在は、五時四十分。まあ、おくれることはないだろうが、できることなら、他の二人の出席者より早く着きたかったのである。

座談会は、総合雑誌『大指標』主催のもので、テーマは、『現代の謀略戦』となっていた。間垣のほかには、外交評論家の大島泉三と東西新聞社外報部次長の柳井明が出席することになっていた。

この座談会には、間垣は、最初から気が進まなかった。

大指標の編集部の話によると、大島も柳井も、スパイ問題の専門家だという。そして、大島は五十三歳、柳井も四十五だそうだから、二人とも、現在三十七歳の間垣よりは、かなりの年長者であった。

そうした年長者の中にはいり、しかも、国際謀略について、特別な知識を持っていない間垣が、座談会で、どんなことを話せばいいのか。何か口を挟むたびに、二人の専門家に冷笑されるのではないか——。座談会出席の依頼を受けたとき、真先に間垣が考えたのはそれであった。

だが、相手は引下らなかった。

『大丈夫ですよ。お二人とも、スパイ小説のファンだと言っていました。間垣さんが翻訳されたも

のは、ほとんど読んでいるようです。間垣さんは、ご自分が興味を持つことだけを話して下されば いいんですから……』

『しかし、ぼくは素人なんですよ。たしかにスパイ小説をたくさん翻訳しているけれど、現実のスパイについては、何も知らない』

『結構です。いわゆる専門家ばかりでは、話がどうしても固くなるでしょう？　そこで、間垣さんが、例えば小説では、こんな手が使われているが、実際はどうなのだ、というような話をして下されば……』

結局、間垣は説得されてしまった。一旦は断ったのだが、話の途中から、編集副部長の大田黒が電話に出て来たので、引受けざるを得なかったのだ。

大田黒は、大指標編集部に移る前には、出版部にいて、そのころ、間垣もだいぶ世話になっていた。

座談会がそのようなものであったから、間垣は、少し早目に会場の赤坂クリスタル・ホテルに着いておきたかった。年長者二人を待たせ、ぎりぎりに到着したりしては、いろいろ謝まったりするのが面倒であった。

だから、間垣は、たっぷり余裕をとって家を出た。早く着きすぎたら、コーヒーを飲んで時間をつぶせばいい。

ところが、西麻布のマンションを出て、地下鉄の駅まで行きかかったとき、手に冷たいものを感じた。雨が降り始めたのだ。

ことによると、向うに着いたころに、雨は本降りになるかもしれない。地下鉄の駅からクリスタ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ル・ホテルまでは、ちょっと歩かなければならないが……。間垣が、空を見上げながら、こんなことを考えたとき、空車の表示をしたタクシーがやって来た。間垣は、反射的に手を上げてしまったのだ。

ところが、それが裏目に出た。思った以上に、道路が混んでいたのだ。

何があったのだろうか、と運転手に聞いてみると、

「しようがないですよ。十日の金曜日ですから……」

という返事が返って来た。五、十、十五、二十など、五で割り切れる日は、手形決済の関係もあって、道路が混むという。だから、運転手たちは、それらの日を『五、十日』と呼んで、昼間は余り稼ぎにならない、と覚悟しているのだそうだ。おまけに、週休二日制を取る会社が多くなってから、金曜日も混むようになった……。

いっそのこと、途中で降りて、歩いた方がいいか……。間垣は、すでに、二度そう考えていた。タクシーはワイパーを回しているが、雨の降りは、それほどでもないようだった。このくらいなら、ずぶ濡れになることもあるまい……。

しかし、それを口にしようとする瞬間、二度とも車が動き出した。偶然、信号が変ったのだろうが、間垣は、何か自分がからかわれているように感じた。

その癖、十メートルも進まないうちに、また車は停ってしまう。

間垣は、もう一度、窓の外を見た。

そして、はっとして、目を凝らした。反対方向の車線も、こちらと同じように、のろのろ運転をしているが、その中の一台、タクシーの客席に坐っている女性が、彼の注意を惹いたのである。

道川八重子だった。長く肩のあたりまで無造作に垂らしている髪と、高めの鼻に特徴があった。彼は、急いで窓ガラスを降しかけた。窓を開けて声をかける気になったのだ。

だが、それは間に合わなかった。その車は、すぐに動き出し、彼のうしろの方に去って行ってしまった。

いや、もともと無理だったろう。こちらの窓を開けたところで、向うは窓を閉めたままだろうから、間垣の声が聞えるはずはない……。

間垣は、しかし、一応振り返ってみた。車体が緑色のタクシーであることだけはわかった。

座談会が終ると、担当した編集部員が、どこかに飲みに行かないか、と誘ってくれたが、間垣は断り、ひとりで、ホテルのコーヒー・ショップにはいった。座談会の間じゅう、気になっていたことがあり、それをたしかめたいと考えたのである。

『気になっていた』と言っても、そのために座談会がおろそかになりはしなかった。間垣としては、一応言いたいことは、ちゃんと発言したつもりだし、その発言が、ピントはずれのものでもなかった、と思う。大変面白い座談会になった、と編集部員が言ったが、あれは、単なるお世辞ではなかったろう。

ただ、他の二人の発言中、間垣には、ふっとあの道川八重子のことを考えている一瞬があった。そして、つぎの瞬間、そんな自分に気づき、あわてて、大島泉三や柳井明の言葉に耳を傾けるというぐあいだった。だが、そのことが、二人の出席者や司会役の編集部員には気づかれた形跡はな

い……。

あれは、たしかに、道川八重子だった。間垣は、ホテルのコーヒー・ショップで、コーヒーに、ミルクを入れながら考えていた。コーヒー・ショップは、空いた席がいくつか目立ったし、彼の席は、隅の壁際だから、思考が乱される恐れはなかった。

たしかに、道川八重子だったが、彼女がタクシーに乗っているはずもなかった。従って、他人の空似、あるいは間垣の見間違えと考えるのが合理的な説明であろう。

しかし、だからこそあのとき、間垣は目を凝らして、彼女を見つめたのだ。その際の、彼の心の動きを、文章にすれば、

〈あ、道川八重子だ。ばかな、そんなはずはない、彼女は死んでいるのだから。他人の空似か？いや、それにしては、似過ぎているようだ〉

と、いうことになろうか。もっとも、そんな風に考えたのは、一秒の何分の一という短い時間であったろう……。

そして、彼は目を凝らして、それがどう見ても道川八重子であると、確認したのだった。

道川八重子は生きていたのだろうか？

常識的には、このように考えるのは自然ではない。もし、他の人が、きょうの間垣の立場におかれたら、百人のうちの九十九人までは、こんな風には考えないだろう。むしろ、自分の錯覚と受けとめるに違いない。

しかし、間垣は、なぜか、そのように考え捨てることができなかった。

彼女——正確には、あのタクシーに乗っていた女を見た直後以上に、何時間かが経ったいま、あ

れは道川八重子だった、という印象が強まっている。あるいは、自分が実際に、道川八重子の死を目にしていないからかもしれない――コーヒーに口をつけながら、間垣はそう思った。

彼は、その事実を、新聞で読み、さらに、彼女の養父からの挨拶状で知ったに過ぎない。もちろん、一般には、それだけでも十分であろう。間垣にしても、ふだん、死亡通知の葉書を受け取ったような場合、それを疑ってかかるようなことは、一度もなかった。道川八重子の場合にしても、『とうとう、こんなことになってしまったのか。もともと、彼女には無理だったのだろう』と考えはしたが、その死を疑ったりはしていない。

しかし、実際には、心のどこかに、納得できないものが残っていたということか。だからこそ、ほんの五秒足らずの短い時間、道川八重子らしい女を見たという体験が、意外なほど強く、彼の内部に残っている……。

間垣は、五年前まで、中央日報社に勤めていた。もともと、好きでなった職業だし、ずっと新聞記者をして行くつもりだった。

その中央日報を退職する気になったのは、郷里にいた兄が、突然、心筋梗塞のため死んだからであった。

兄の従郎は、亡父のあとを継ぎ、静岡で間垣病院の院長をしていた。内科、小児科、外科、産婦人科が診療科目で、入院設備も整った、個人病院としては、大きな病院と言えるだろう。

その院長が急死した。あとは、取り敢えず産婦人科医でもある妻つまり間垣には義姉にあたる美

知子が継ぐことになったが、ひとりでは心細いから、帰って来て、事務局長として手伝ってくれないか——と、間垣は美知子に頼まれた。

兄が生存中は、とくに事務局長なるものは置かず、院長が事務をも統括していたのだった。

葬儀の翌日、義姉の美知子から、そのことを切り出されたとき、間垣は言下に断った。自分に、そのような才能があるとは思わなかったし、彼女の話が、ひどく唐突な感じがしたのだった。当時、彼は社会部の遊軍だったが、仕事が一番面白い時期でもあった。

だが、五日間の休暇のあと、いつものように出社してみると、事情が変っていた。新潟支局に行ってくれないか、と社会部長から打診されたのである。

新潟支局で県庁を担当していたベテラン記者が、肝硬変で倒れてしまったので、三十代の中堅社会部員に行ってもらいたい、と地方部長から要請され、結局、白羽の矢が、間垣に立ったらしい。

『何しろ、君はチョンガーで、身軽だから』

というような言い方を、社会部長はした。二年経ったら、確実に呼び返してやる、とも部長は言った。

間垣は考えてしまった。二年ぐらいなら、部長に貸しを作っておくのもいい、とも一方では考えた。だが、部長は、これを借りと受け取るかどうか？　第一、社会部長は停年が翌年に迫っていた。彼が停年退職してしまえば、口約束など、何の意味も持たなくなる。後任の部長が、そんなこと何も聞いていないと言えば、それまでであろう。

結局、一晩考えて、間垣は新潟行きを断った。

『断る？　どういう意味だ？　内示とは言っても、もう決まってしまったことなんだ。あしたにも、

辞令が出ることになっている』
部長は声を荒げた。間垣が、そのような態度に出るとは、予想もしていなかったのであろう。
『ですから、これを用意して来ました』
間垣は、内ポケットから、封筒を出して部長に渡した。その表には『退職願』と書いてある。
『何だ？　退職するというのか？』
『ええ、きのうひと晩考えたのです。いきなり、あっちへ行ってくれ、これはもう決まったことだ、と言われたのでは、今後も不安でしかたがありません。しかも、異動の理由が、チョンガーで身軽だから、というのでしょう？　これは、いまのうちやめた方が賢明だと思ったのです』
『やめてどうするんだ？　そう簡単に仕事は見つからないぞ』
『ご心配いただいて済みません』
間垣は笑いながら言った。『ご承知のように、兄が死にました。そのあと、病院の事務局長をしてくれと言われていますので……』
『何だ？　じゃあ、最初から退社するつもりで、東京へ帰って来たのか？』
部長は肩で息をしていた。もともと肥満体で、心臓は丈夫ではない。少し興奮すると、息遣いが荒くなるのだ。
『いいえ、そんなつもりはなかったんです。でも、もう一度地方勤務をする気はないんです』
部長は、いろいろと慰留の言葉を述べたが、間垣は突っぱねた。新潟行きを取消すとでも言えば、間垣も考えただろう。だが、部長の口からは、白紙に戻すという言葉は、ついに出なかった。
いったん決まった人事異動を、一片の辞表によって取消したりすれば、それは悪例になるのだか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com